記憶研究の現在地

記憶が人文社会科学の命題であることが認識されてすでに久しい。アメリカ研究分野においても、21 世紀転換期に記憶が一大テーマとなった。それは少なからず言語論的転回や、批評理論への応答として展開し、それゆえに、歴史叙述が仮構する主体の位置、さらにはナショナル・ヒストリーという枠組みの対極にある「証言」や、そのもとにある「トラウマ」ないしは「責任」といった、極めて倫理的な思弁を活性化させつつ学際的に進展した。

その波から 20 年余がたったいま、とりわけ「記念碑」の是非などをめぐって、記憶とはなにかを問う必要性が、改めて意識されている。だが他方、人間の営みや公共空間、さらにはその実体を掬い取るべき歴史学の射程自体も多大な変化を遂げている。本シンポジウムは、3 名の歴史家を招聘し、こうした変化の実相と記憶研究が置くべき足場を、それぞれの具体的な主題を通して考えることを目的としている。記憶の学問研究にアクチュアリティを付与するものは、社会がいかに配置され、人々の感情や自己認識がいかに構成されているか、そのマテリアルな検証にほかなるまい。

講　師：　望戸 愛果（立教大学兼任講師）
山本 航平（同志社大学文学部嘱託講師）
田村 理（北海道大学大学院文学研究科専門研究員）

討論者：　松原 宏之（立教大学文学部教授・アメリカ研究所所員）

司　会：　新田 啓子（立教大学文学部教授・アメリカ研究所所長）

2022 年 9 月 15 日（木）14:00 ～ 17:00

オンライン開催（Zoom ウェビナー）

右記の QR コードか URL からお申し込みください。https://bit.ly/3bmy9sM

お問合せ：立教大学アメリカ研究所（E-mail:ramins@rikkyo.ac.jp　Tel:03-3985-2633）